



六
花

5

2022

りっかはいくかい

あれからみそとせ



山田六甲

ししなんこうとがりあいわいのせとそみかつり

竜宮に溺るる夢やしやぼん玉
月日とはかういふものか新樹光
顔ぶれのいづれ劣らず松の芯
みそとせのちぎりもふかき端午かな
その時々人智授り松の花
豊の川豊の山あり緑立つ
背の低き山の人気や夏はじめ
野のやうな印南に麦植うるかな
石の上にも三十年春過ぎにけり
わいわいと歩みて来たる松の芯
祝ふべく熱田津に来て青葉かな
愛だけで生きていけるよ子子は
料理なら奈良の町家の切子かな
瓦斯灯の下で乾杯冷し酒
飛魚の出汁が最高冷さうめん
海晴れて沖にむくむく雲の峰
秋桜もう揺れてゐる鳩鳴いて
運の良き主宰と運の良き鮎と
南限の花水盤にくるりくるり
障子はつし襖をはづしさて帯を
白シャツにオメガの時計日を返す

すでみしのたねくしろよもらかれしがしでうよ

欧羅巴帰りの祖父のパナマ帽
後ろから抱きしめてゐる蛍の夜
出来心のやうな雷走り去る
水神の怒りのごとく鼓滝
がさごそと蝮が蛙追ひにけり
小町草虫はしきりに近づきぬ
霊峰にはなれずつぎつぎ雲の峰
かるがもの危険な道路渡りきり
辣蕪のお茶漬けさらさら屁の河童
木栓は叩けば抜ける生ビール
よれよれの麻服がよし善野行
ろくでなし主宰の歩く日傘かな
しらじらと夜明けが近し夏立ちぬ
草いきれ息苦しくも夏はよし
ねぢれたる邯鄲の夢醒難し
滝川の音の飛驒へと岐れ行く
野のすみれ懐紙濡らして持帰る
しみじみと人育ちけり梅は実
みずみずしき心ありけり卵の花は
出る杭は打たれさくらんぼは熟るる
素晴らしきわが人生や五月来る

「せきれい」主幹の毛利喜子さんから文鳥のごとく六月号にも載せたいと承諾のむねお便りをいただいた。創刊号を見てみると六甲が小学四年のころ、かり版を宿直の父と刷ったことが懐かしい。文鳥のごとく重岡愛さんが「せきれい」に執筆していただいて感謝。

老いぼれの一踏ん張りや冬木の芽 草場つくし

「老いぼれ」は加齢による心身機能の衰え、ぼけ、あるいは、そのような様子を呈する老人自身を罵つて言う語だが、掲句は「一踏ん張りしよう」という決心をした。この決意は「私も」という共感を呼ぶ言葉。本人が奮い立つ気持ちになったのは何か分からないが、ここで朽ち果てられないという気持ちが伝わってくる。老木の冬芽のようにじつと絶えている姿が勇気を与えてくれる。彼女自身は決して老いぼれではなく、これから六花の作家として活躍出来る可能性を秘めている。(六甲)

(おいぼれのひとふんばりやふゆきのめ くさばつくし)

結氷下分子まで澄み水眠る 磯野青之里

結氷下とは結氷をしているその寒さの中で、何もかもが凍てつく日にということであろう。水が澄み切つてその分子までが眠っているようだ、という句。氷より、凍らない水のほうが冷く感じることもある。厳冬の水を覗き込んで誰もが言えなかった「水眠る」という新しい季語の発掘表現に至った。彼も当然に出現した作家のようであるが、何年も前から句会で力を発揮しており、これから六花を支えて行く一人である。(六甲)

(けつびょうかぶんしまですみみずねむる いそのあおのり)

父の定席 ◎ 笹村 政子

寒風の音なく戻り来る小舟
弓なりに桶に張りつく寒の鯉
寒卵白磁の皿の陰濃かり
梅が香のほのかに人形供養かな
借物の加湿器ごぼと鳴りにけり
片栗はいつも遠くにみる花よ
凍蝶の翅の吐息を薄日かな
雪柳風のねぢれを知りそめし
城跡の坂は下りに竹の秋
晩年の父の定席山笑ふ

▽父の定席の句。父上は晩年いつも同じ席で過ごされたのだろう。晩年とは一生の終わりの時期だが、人によって寿命の差があるから、一概には何歳といえない。が、振り返ってみれば、というただし書きを含んだ言葉だと思う。従って、今が私の晩年などとはいわないのである。さてお父上は晩年いつも同じ席に陣取って過ごされた。今は誰もいないが、その席をみるといつもそこに居た亡き父の姿が見えるのである。

▽寒の鯉の句。桶に入れられた鯉は料理前の少しの間、厨の桶に入れられたのであろう。鯉は「俎の云々」と言われるとおり、もうじたばたしないので観念してじっとしている姿が哀れ。この鯉は身を弓なりにされているのである。そこに作者は張り付くと哀れをみたが、句の上では客観的に写生。これが俳句。

▽凍蝶（冬）の息は翅の動きに連動している、とみた。冬の蝶々はほとんど動かないが、政子には動いたように見えた幻影かもしれない。

▽雪柳の句。雪柳はすんなりと枝垂れているように見えるが、よく観察すると、枝はさまざまにねじれているのが分かる。わたしも十数年昔、かぐや姫温泉で、床の間に生けてあった雪柳がねじれているのを知って感銘したことがある。そのとき「床の間に生けてねぢれる雪柳」というのを詠んだ。

▽城跡の坂は下りに句。城跡といえは私にとっては竹田城（雲海で有名な）を思い起こす。車で上ることはできず。徒歩でないと城跡に登れない。坂は上りよりも下りの方が足に強い負担がかかる。下りになるのは上りがあったからで、「上り」は略した表現。上りよりも下るほうがエネルギーが必要なのは自然の摂理。「人生下り坂最高!」と叫ぶのは自転車俳優日野正平さんだけ。足腰を鍛えるには下り階段のほうが効果があるという。

▽人形供養は人形に穢れや病を身代わり担ってもらっている。そのお札に供養をするのである。梅の薫るその下で。場所は奈良のお寺か。

初鏡 ◎ 志方 章子

空中に掴み取つたる散紅葉

につこりと笑つてみたる初鏡

初鏡けふより生まれ変はらむと

顔半ば隠してゆけるシヨールかな

島の灯のいまだ点れる冬の朝

節分や鬼と祝へる誕生日

節分の小窓に笑ふ鬼の面

旅の無事仏に頼む着脹れて

牡丹雪窓に張りつく旅列車

旅の果一人の冬夜戻りけり

▽初鏡の句。初鏡とは女子が正月初めて鏡に向かって化粧すること。鏡は霊力を持つとも信じられていた。鏡をのぞき込むとその奥に別の世界があるように思える。この世のものでない別の世界が見えるので、邪悪なものを祓う力もあるという。副葬品にも使われたように古代の人は信じていたのかもしれない。鏡はまた、三種の神器の一つでもある。掲句、章子は正月、鏡の中の自らの顔に笑つてみた。鏡は映る人の心まで影響するので、笑うと一年を笑つて過ごせるのである。また、今日から私は生まれ変わるのだと決意をしている。自ら変わることはわかることでもある。

▽シヨールは女性用の肩掛け。防寒・装飾などに用いる冬の季題。今はマスクで顔は半分隠れるが、気恥ずかしいのと、顔が障すのがいやな人はシヨールで顔を隠す。たとえばこういう女性は川端文学の雪国にでてくる駒子か。東北の角巻で顔を隠した女性の髪にちがつく雪が付いているのは艶めかしい。小説の火車現場まで着くと、島村はたくさんの人目が気になり、そつと駒子から離れるが、いつの間にか駒子は島村のそばにやって来ていて、二人は手を握りあう。火の粉と天の川が広がった夜空を眺めているうちに、島村は駒子との別れが近いことを痛感してゆく。こういう場面はカズオ・イシグロの「日の名残り」の主人公の昔の執事仲間であった女性との密かな通い合う心にもあり、ノーベル文学賞にノミネートされたのもうなずける。

▽島の灯の句。明け方になっても明石海峡の対岸淡路島の灯しが寒く点いている光景。明け方の海は漁村が眠っているのに何か不思議な力がある。明け方に目覚めた章子の眠気が残る海の景色をみているのがよく伝わってくる。

▽旅の果の句。「果」が佳い。旅から帰って独り寝の生活がもどつたのだ。旅から家に戻るとほっとする気持ちと旅の楽しい火照りがさめるようで寂しい気持のない文ぜ。

梅の紋 ◎ 升田ヤス子

梅の紋誇らかに着てとんど守

帰宅せり切干戻す香の中に

大学の宗教セミナー百千鳥

兵庫大

玉垣を奉納しけり初緑

雨粒のふくらんで咲く臘梅は

磨崖仏福豆茶置く遙拝所

ゆき摩りの寺に頂く追儼豆

歩行器を椿の庭に下ろしけり

やはらかく洗車のブラシよなぐもり

青ぬたや刺子の布巾しばし掛け

▽とんど守の句。とんどとは地力によって呼び名が違うが、「左義長」のこと。左義長（さぎちよう、三棹杖）は、小正月に行われる火祭りの行事。1月14日の夜または15日の朝に、刈り取り跡の残る田などに長い竹を3、4本組んで立て、その年飾った門松や注連飾、書き初めで書いた反故などを持ち寄って焼く。その火を火事にならぬように守る。もちろん観客の安全も守るが、その火で焼いた餅を持ち帰って縁起物として食べる。「生焼けのどんどの餅を持ち帰る 延川笹子」がある。

▽初緑の句。神社か寺か、玉垣奉納の依頼がきた。檀家や宮総代には名誉なことで、末代まで寄付をした人の名前が玉垣に刻まれて残る。そのためには相当額の寄付を余儀なくされる。が、ご主人の名前が末代まで遺るのでお目でない。

▽臘梅（ろうばい）は熏り高い花。陰暦の12月にあたる臘月（ろうげつ）にウメの香りの花を咲かせるためだと言われている。俳人には人気の高い花で、掲句は「雨粒がふくらんだように咲く」という表現が佳い。なんだか難しい花であるのに心象的に詠んでいる。

▽通りすがりの寺で追儼豆をもらった。思わぬ幸せと喜んでいるのだ「ゆき摩（ず）り」という文字は広辞苑にはあるが今の人は使わないのだろう。時代の変化によるのが文字の運命。

▽歩行器の句。椿咲く庭におろした、というのは歩行困難の人、つまりご主人か。ヤス子最愛のご主人を椿が美しいので庭におろして椿を堪能させたのであろう。優しいヤス子である。

▽春になると黄砂や春塵で車が汚れる。がそれを洗う洗車ブラシも暖かいおかげで柔らかく感じるといのである。珍しい題材。暖かくなると物は柔らかく優しくなる。人間も。よなぐもりとは黄砂で曇ったような天気。よなぐもりは霾（つちふる）とも。

▽青ぬたの句。もとは高知県の伝統的なタレの一種で味噌とお酢に砂糖を混ぜたもの。春先分葱や野蒜をゆでて酢味噌で合える。私も大好物である。

立春 ◎ 善野 行

火を守りて凍星と夜を明かしけり

新春の風の祝ぎ歌都府楼趾

幹の虚さらして春を待つ桜

春遠し飛驒にゆかりの古桜

冬籠り我なりに読む蕪村集

立春や腹の子腹を蹴りゐるか

風光りそめてぞ長き立話

背伸びして水騒がすや鴨の羽根

末黒野に現れては豊かなる水路

いつのまに野に仏の座おはしける

▽凍星の句。大晦日から正月の元旦まで神社の火を守る役を担った。教師の職を辞してから、急に村の役を仰せつかうようになった。家の長男としてどっと村役が回ってきたのだ。大晦日から元旦には大好きな日本酒が飲めるのに、と思っていたが、甘い考え。村の社の火を守って火事や参拝者のけがなどが起きないように注意がいる責任の重い役目で、暖かいようだが寒く厳しい夜なのである。火は薪をくべすぎてもいけないし少なすぎても暗く寒い。参詣者の暖と明かりを兼ねた大切な役目でもある。

▽祝（ほ）ぎ歌とは祝福の気持ちをごめたお目でたい歌で古くは天皇の行く先々の土地や山や海を和歌でほめ、災いや荒れないように祈った。掲句の場合は風が新春を祝っているよとあいさつした句。都府楼址は九州大宰府政庁跡（都府楼址）で「天の川の下に天智天皇と臣虚子と」という句が高浜虚子に詠まれている。掲句もいにしえに投げかけた行のロマンである。

▽桜に花の咲く時期が来た。が、その樹にはあまたの傷や虚（うる）があり泰然とした古木の風格がある。そういう古木に花が咲くから感動するのである。

▽冬籠りの寒さしのにぎに外出を控えて、「蕪村句集」を自分なりに読んでみた。正岡子規は芭蕉よりも蕪村のほうが良いと評価したが、果たしてそうであろうか、自らの目で知恵でひも解いて確かめてみたいという知識意欲がうかがえる。人類はホモサピエンスで、持つて生まれた知識欲が他の人類を絶滅させたという論があるくらい。（所説はさまさま）。蕪村の句をひも解くのも俳句を詠む上で大切なことである。新説を唱えてくれる楽しみもある。

▽鴨の句。鴨は時々水に浮いて背伸びしたように羽ばたく。その様子を詠んだ。その行為が水を騒がしていると表現。以前、民主党が政権を獲って、丹後自動車道が無料になり、ほとんど毎日のように車を走らせた。その足で余呉湖まで足を伸ばし鴨の群れを深夜まで眺めた。さて行の詠んだその鴨は、飛翔するでないのに羽ばたいて走る。まさに「水を騒がす」という表現が当たっている。鴨の体についた虫や汚れを落とす行為らしいが、それを詩で「水騒がす」と科学変化したのである。「立春、末黒野」も仏の座も鑑賞したいが紙数がない。立春の句はお孫さんが生まれようとしている喜びの句である。

隈笹 ◎ 住田千代子

手の平をはみだす牡蠣を洗ひけり
潮の香の大きく爆ぜて牡蠣を焼く
手の傷に葉塗りこむ牡蠣の夜
枯芝を横切る鳩の一羽かな
隈笹の葉のきはやかに冬ざるる
わたくしの頬にひとひら風花す
左義長や松風に幣燃え上り
松濤の中へ火を噴くとんどかな
戸締りを確かめてゐる追儼の夜
寝そびれし追儼の鬼の青と赤

▽隈笹（くまざさ）の句。パソコンで打つと熊笹となる。これはパンダが笹を食用としているために猫熊の文字の影響を受けているためと思われる。本当は隈笹と書きその由来は笹は歌舞伎の隈取をしたようにくつきりと縁どられていることによるものという。夢風撰候補。

▽枯芝の句。鳩が横切るのは読者の目の前。芝は枯れていても寝ころびたくなるが、鳩もその上を心地よさそうに歩くのを詠んだ。

▽牡蠣の句はどれも臨場感があつて面白い。牡蠣殻は火にあぶると殻が割れてはじける。怖い、怖さが風味なのである。手の傷の句は牡蠣殻を剥くときにできた傷。殻の切り傷と寒さの罅切れの傷を女性は丹念に葉を塗りこんでケアをするのである。手のひらをはみ出すくらい大きな牡蠣を割る女性。

▽風花の句。風花は晴天時に雪が風に舞うようにちらちらと降ること。あるいは山などに降り積もった雪が風によつて飛ばされ、小雪がちらつく現象をいう。言葉としては美しく女性の名前に使いたいくらい。「わたくしの」とことさら一人称を用いたのは、現代詩的な効果をもたらす。ほほに触れた一片の風花は一瞬に溶けて消え淡い夢の出来心のようにである。

▽左義長の句。松風と言つてお目でないフレーズをつけて、しかし、その風に煽られて幣（ぬき）が燃え上がり風に乗って飛ばず。火事になるのではないかと、心配も少し。

▽松濤の中への句。「松濤」とは松に吹く風の音を波の音にたとえていう語で句のように松濤に煽られて燃え上がる左義長の雄大さと恐怖がこもることで、神が天にかえつてゆくような心地さえる。松籟も松濤も良い言葉である。言葉選び（斡旋も）短詩には必要なこと。

▽「寝そびれし」の句。これは彼女の務める学童保育での光景か。お面をかぶった子供がお昼寝の時間になつても興奮して寝そびれているのだろうか。

卒業す ◎ 平居滯子

待春の友を誘ひハーブの湯
豆を打つこの静けさに耐へかねて
節分に子の帰り来る鬼連れて
立春の濠に空ゆくものの影
落羽松春の光の気根まで
母の母校梅咲く坂を越えてより
沓脱に梅の蕾のころころと
初蝶の金管楽器より出づる
垂直に落ちて椿の天へ向く
手作りの雑巾残し卒業す

▽卒業の句。昔は雑巾を子供たちが縫わされた。そのことを思い出して句を詠んだのであろう。手縫いの雑巾を残して卒業したからもしかしたら今も学校に残っているかも知れない。が、子供さんのことを詠んだかも。

▽ラクウショウの句。「落羽松」とも呼ばれ、冬になると枝ごと落ちた葉が鳥の羽に似ていることが由来。漢字では「落羽松」だが、マツの仲間ではなくスギの仲間。老樹になると気根が生えるとも。明石城公園の球場横に一本植えてあり、人は見上げながら歩く。彼女の住む堺市の陵付近にも生えているのだろう。気根については銀杏とともに後日再び考えたい。

▽母の母校の句。母上の母校がこの梅の坂を超えるとある。母の母校という設定の句はあまり見ることがないので、一度知りたいものだ。関西ではこのような女学校は神戸女学院か関学かであろう。春には梅が咲く坂であるというのがいい。梅花女学院かも。

▽節分の句。子供が帰ってきた。「鬼連れて」だから、鬼の面をかぶったお孫さんであろうか。「さあ、大変」という言葉が出てきそうな雰囲気。立春の句は陵の環濠に空を飛び行くものの影がさつとよぎる。その物影にさえ今日から春だという雰囲気があると感じたのだ。

▽初蝶が金管楽器から出てきたよ、という句。現実的にはありえないが金管楽器が春の日差しにピカッと光ったのが初蝶が飛び出してきたように感じ詩的に表現したのである。夢風撰候補。

▽椿の花が落ちた。その落ち方が垂直に落ちたと感じたのである。「ふらふらと落ちたのだよ」と言っても「いいえ垂直に落ちたのです。」とそれを曲げない。椿の落ちさまは武士の最期のように凛々なのであるが、そのせいもあつて滋賀近江では椿を庭に植えない。首が落ちるのをイメージするので縁起が悪いと昔から言うのが理由なのである。